

高齢者にみるトラウマ的ストレスの長期予後に関する研究

—大水害から半世紀を越えて—

坂口守男

(大阪教育大学保健センター)

〈要旨〉

ある水害の被災者たちに半世紀以上経過した時点で面接を行い、トラウマ的ストレスの残存症状と恐怖体験からの回復過程を中心に調査した。またこの体験が老年期の精神症状の発現と形成に及ぼす影響についても検討した。和歌山県K町H地域を主たるフィールドとして水害体験者35名(男性8名、女性27名)から聞き取り調査を行った。主たる調査項目は被災時の年齢、被害状況、当時の精神症状並びにその持続期間、回復因子・持続因子、現在の精神的問題、自己肯定の可否等についてであった。被災時の年齢は 25.1 ± 9.4 歳である。被害状況に関しては近親者を亡くした人が7名、家屋の倒壊流出が19名であった。当時の精神症状並びにその持続期間に関しては、恐怖感が20名で、そのうち現在も恐怖感のある人は10名であった。現在も続く苦痛な夢は2名に認められた。フラッシュバックを経験した人は1名であった。面接中、暴露による心理的苦痛を示した人は1名、暴露による生理学的反応を示した人は3名であった。回避に関しては場所の回避が2名いた。感情麻痺は2名であった。覚醒亢進症状に関しては過去に過度の警戒心のあった人が4名、現在もある人が4名であった。トラウマ的体験からの回復因子としては「復興に向けての仲間意識」と「記録を残す作業」「慰霊のための定期的な集い」などが考えられた。逆に持続因子としては「孤立感」と「その後の悲哀体験」が考えられた。現在の精神症状としては認知症疑いが3名、抑うつ傾向が1名、被害妄想を示す者が1名であった。人生を自己肯定できる人は33名、どちらかといえば否定的な人は2名であった。これらの結果に基づいて若干の考察を加えた。

キーワード：自然災害、トラウマ的ストレス、長期予後、残存症状、回復

〔はじめに〕

トラウマ的ストレスの長期予後に関する研究は精神科領域にあっては一つの重要な課題と考えるが、これまで十分な研究がなされているとはいえない。そこで今回、私はある自然災害の被災者たちに半世紀以上経過した時点で面接を行い、トラウマ的ストレスによる精神的爪痕とその回復過程について調査を行うことにした。尚、このような調査は十分な相互理解がなされないと協力がえられないものだが、幸い2001年からこの地域で地域保健活動〔1〕、〔2〕、〔3〕、

〔4〕、〔5〕、〔6〕、〔7〕、〔8〕を続けていたこともあって町役場、特に保健師さんに大変手厚く協力していただくことができ、住民の方達の理解を円滑に得ることができている。

〔目的〕

1953年7月18日、和歌山県を中心に西日本は大水害に襲われた。7月18日の降雨量は多いところで530ミリに達した。この水害による死者は1013名、家屋全半壊は約25,000棟であった。中

でも和歌山県有田川流域、特に同県 K 町 H 地域（以下 H 村と呼ぶ）では甚大な被害を蒙った。当時 2000 人ほどいた村の人口のうち、111 名が生命を奪われ、250 棟の家屋が倒壊流出した。公共機関は壊滅、農地もほとんど流出した。山崩れによって河川が堰止められて出現した巨大な天然ダムが 2 ヶ月後の台風で決壊して被害はさらに拡大した。現在は過疎化のために人口は 550 名を割っているが、高齢在住者の多くは水害体験者である。本研究ではこの水害体験者を対象として水害から半世紀余りが経過した時点でのトラウマ的ストレスの残存症状と恐怖体験からの回復過程を中心に調べることにした。またこの体験が老年期の精神症状の発現と形成に及ぼす影響についても若干の検討を加える。

【方法】

H 村を主たるフィールドとして水害体験者から聞き取り調査を行った。役場の保健師の協力をいただいて水害体験者を家庭訪問し、十分に時間をかけて面接した。また村を出ていても連絡のとれる人は面接の対象とした。主たる調査項目は被災時の年齢、被害状況、当時の精神症状並びにその持続期間、回復因子・持続因子、現在の精神的問題、自己肯定の可否等についてであった。

【結果】

現在のところ 35 名（男性 8 名、女性 27 名）の方達の調査を終えている。被災時の年齢は 25.1 ± 9.4 歳（mean ± SD）で、最小年齢は 6 歳、最高年齢は 44 歳である。被害状況に関しては近親者を亡くした人が 7 名、同級生を亡くした人が 4 名、家屋の倒壊流出した人が 19 名であった。これらの被害を受けなかった人は 10 名であった。

当時の精神症状並びにその持続期間に関しては、恐怖感があるという人が 20 名で、そのうち現在も恐怖感がある人は 10 名、10 年以上続いた人が 3 名、数年続いた人が 4 名であった。記憶の想起・侵入は 0 名、苦痛な夢は 2 名（現在も続いている）、フラッシュバックを経験した人は 1 名であった。面接中、暴露による心理的苦痛を示した人は 1 名、暴露による生理学的反応を示した人は 3 名であった。回避に関しては場所の回避が 2 名いて、それは現在も続いている。感情麻痺は 2 名で、そのうちの 1 名の場合は少なくとも 9 年間続いた。覚醒亢進症状に関しては過度の警戒心があった人が 4 名、現在もある人が 4 名であった。他に被災後しばらく入眠障害になった人が 2 名いた。トラウマ的体験からの回復因子としては「復興に向けての仲間意識」と「記録を残す作業」「慰霊のための定期的集い」などが考えられた。逆に持続因子としては「孤立感」と「その後の悲哀体験」が考えられた。現在の精神症状としては認知症疑いが 3 名、抑うつ傾向が 1 名、被害妄想を示す者が 1 名であった。人生を自己肯定できる人は 33 名、どちらかといえば否定的な人は 2 名であった。

以下に事例を一部提示する。

事例 1 感情鈍麻状態が長期間続いたケース

当時 28 歳、女性。先年、夫に先立たれ、現在は一人暮らし。三人の娘がいたが、水害で幼い子を一人亡くした。これまで水害のことは一切話さないようにしてきた。

（当時の状況）「家は新築したばかりだったが、2 ヶ月後の台風で天然ダムが決壊して流されてしまった。大雨の前日、夫はまだ壁の仕上げをしていた。左官の仕事で体中についた泥を落とすために川に降りていった。3 歳の子が『お父ちゃん、早く上がってこい、早く上がってこ

い』と上から何度も叫んでいた。その情景と声が頭にこびりついている。忘れることができない。逃げた日の朝は土砂降りだった。バケツをあけるようだった。最初お寺のお堂へ逃げた。夫はお堂の陰で店から持ってきていたお菓子を3歳の子にそっと食べさせていた。お堂が危なくなかったので、県道へ出た。雨が滝のように降ってきて長靴が脱げた。山を駆け上がった。尾根を通って逃げた。柴小屋があってそこで休んでいると山崩れがきて柴に押しえられて子どもを死なせてしまった。上の子も頭から泥に埋もれてどろどろで口の中から土をかきだした。夜明けに出た。素足で逃げた。年寄もいて荷物もあるのでなかなか動けなかった。胸まで泥につきながら逃げた。山のむこうまで回った。子どもが死んだ時、涙一つ出なかった。悲しみを乗り越えていたと思う。翌日、子どもを拾い上げてきて貰ったが、その姿を見てもやはり涙一つでなかった。山を降りてきて、避難所暮らしが始まった。救援物資には着古したものが多かったけど大事に使った。風呂敷をつないで一枚にしてその上に寝た。みんな同じだったので悲しいと考える間もなかった。大きな被害の出た地域のことを聞いてあの子はみんなの身代わりになってくれたと思ってあきらめることにした。夫にも『死んだ子どものことは二度と口にしない』と言われていた。

(当時の精神状態について) 避難所では他の人のしていることが自分は手につかず父親によく怒られた。みんなと違う方向を見ながらぼんやりと坐ってばかりいたと思う。4年ほどたって父親がなくなった。その時も涙が出なかった。9年経って姑さんが死んだ。それから一週間経ったころに涙が出てきた。それまではいくらかわいそうだと思っても涙が出なかった。自分が

薄情者だと思っていた。半日涙がぼろぼろと出てきた。悲しくもないのにぼろぼろと出てきた。自然といろんなことが次から次へと思い出されてきて涙が溢れてきた。それまでは水害のことは夢に見ることもなかった。

(復興について) 高野山にみんなで生活必需品を運びにいった。乳飲み子が待っているので休まず一目散に歩いて帰ってきた。生きていくために同じ作業を続けてきたことが治療になっていたと思う。(二度目の訪問時、これまで誰にも話せずにきたが胸の支えが取れて、死んだ子どもの思い出を子どもたちと一緒に語れるようになったという報告をいただいた。)

事例2 フラッシュバックを呈したケース

当時9歳、女性。

「水害の日、大雨警報が出て近所を見回るために父が家を離れることにすごく不安になった。父が出た直後、近所の家が土砂に潰されてしまった。みんなで寺のお堂へ避難した。2、3日するとからっと晴れた。天気が続いたので大丈夫かなと思っていたが、再び雨が降り始めた。前の山が動いているのが見えて避難を始めた。お堂が土砂に飲み込まれた。この時、近所のおじいさんが生き埋めになった。おじいさんは救出されたが、衰弱がひどく動けなかった。おじいさんを放っていけないので恐怖に耐えながらみんなでおじいさんを最後まで見取った。それから高野山へ逃げた。一週間程で家のある人は村へ帰ってきた。はじめ、父は田舎に残るつもりだった。しかし家族の話では自分は雨が一粒でも降ってくると居ても立ってもいられなくて気が違ったように『〇〇へ行こう、〇〇へ行こう』と泣き叫びながら何回も別の家を目指して走ったという。そういう姿を見て数ヶ月後、父は田舎を出る決心をした様だった。田舎を出てからは車の

音がごーごーと雨の音のように聞こえて苦しかったが、外を走り回るようなことはなくなった。現在でも時々村に寄っているが、雨の音を聞くと恐くて村には住めない。」

(その後「今でも雨の時は村にいるのはちょっと怖いですが、自分のふるさとの原風景はやはりH村にあります。」という内容のお手紙をいただいた。)

事例3 村に戻ることによって自尊心を回復したケース

当時 23 歳、女性。

(水害時の状況について)「長男が 2 歳だった。2 階にあったものを田んぼへ放り投げたが何も残らなかった。逃げるとき履物も何もないので裸足で親戚の家へ逃げた。そこへは他の人たちも来ていたのでちょっとの間だけ世話になった。村では生活ができないので 3 ヶ月後には他所に土地を買って引っ越した。」

(精神症状について)「家ごと水に巻かれて流れてしまった情景が、夢には見ないけど話していたら思い出してくる。雨が降ると恐怖心が蘇るのは何十年も続いた。今の家は川岸から上がっているので大丈夫と頭では思いながらも不安になった。何か変な気持ちになる。不安な気持ちだけどう説明したら良いかわからない。眠れない日もあった。とにかく今までで水が一番恐かった。」

(水害後の生活)「新しい土地へは頂いた救援物資を持っていったがまともに着ることのできるものはなかった。乞食のような生活をした。10 月に行ったけど前の人収獲したものを全部取り上げた後へ行ったのでその年一年は本当に不自由した。一年してやっと野菜とかを自分で収獲できるようになった。」

(辛い思い出について)「長男が小学校に入学式

する時、黒い服を着せることができなかったこと。救援物資をほどこいて縫い直したものを着せた。今でもその時の集合写真を見るのが辛い。周囲の人に水害の話をして誰もわかってくれなかった。後に夫は村八分みたいにされたことを子どもたちに話した。どこの馬の骨か牛の骨かわからんものが来たという目で見られていたことがよほど悔しかったようだ。悔しい思いを子どもたちに何度も話した。6 年して田んぼは弟に譲って村に戻ってきた。村では隣の人たちと水害のことも話し合いながら助け合って過ごしてきた。気持ちがわかりあえたからよかった。不自由してみずぼらしい暮らしをしてきたけれど商売をまた始められたらいいなあと言って帰ってきた。仕事も軌道に乗って『〇〇さん、〇〇さん』と言ってきてくれるようになってやっと気持ちが落ちついた。」

(他の災害について)「昨年息子の家が類焼した。すぐに物資を与えてくれた。水害のことを思うとありがたいなあと思う。災害を受けた人は困るだろうと思う。ただ昔と違って連絡が取れるだけでも良いかと思う。当時は川岸の人と連絡取るのも紙に石を包んで投げて取っていた。高野山まで物資を運びに行った。どんな不自由な生活でも乗り越えられるという確信がある。周囲がそんな人ばかりだったから。」

事例4 老年期被害妄想を呈したケース

当時 33 歳、女性。夫が亡くなってから 10 年間一人暮らしを続けてきた。

初回訪問時の様子：周囲の人の話では最近、物を盗られたと行って近隣者を疑うようになって人間関係が気まづくなっているとのことである。

(一人暮らしについて)「夫は長いこと病気を患っていた。随分苦しかったと思う。葬式のあと、しばらく人前に出ていくのも嫌になっていた。」

(将来について)「できれば息子の所へ行きたいと思っている。いつまで生きられるかなと思う。自殺したいとは思わない。息子のところへ行けなかったら福祉でも見てもらおうかと思っている。」

(困ることについて)「夜が心細い。鍵をかけたか何回でも見回る。去年盆前に家を開けていたらお金がなくなっていた。チョッキもなくなっていた。洋服ダンスの下に入れていたらなくなった。40日ほどしたらタンスの引き出しから出てきた。服の下地がものすごくいたんでいたから同じものでも自分のものでないことはわかっている。ある人が盗って古いのと入れ替えたのだと思う。」

アセスメント：物盗られ妄想を認める。長谷川式簡易痴呆診査スケール（HDS-R）は17点。

二回目の訪問時の様子：数ヶ月前から福祉施設に入所している。施設の人の話では相変わらず部屋の物がなくなると訴える。自分で全部片づけてしまうのであるが盗まれたという。

(困ることについて)「入所して時計を盗られた。相手は大体わかっている。」

三回目の訪問時の様子：福祉施設内でそれまで人の出入りの多い一階から出入りの少ない二階に転室していた。他者に配慮的で決して干渉的でない方が隣室者である。二人は気が合うようで本人の隣室者への警戒心は薄れている。

(困ることについて)「困ることは別はない。二階のほうが静かでよろしいです。」

(生活史について)「20歳の時にこの村に嫁いできた。戦争から帰ってきた夫と田んぼで何でも作って食べてきた。苦労して川の近くに家も建てた。でもあの水害で家を流されてしまった。跡形もなく全部流された。それきりもう家を建てる力もないいろいろな苦労してきた。水害後

は家族6人よその家の軒下を借りて住んでいた。辛いことが多すぎた。」

(水害の時は)「小さい子を連れて山を駆け登って逃げた。田んぼの苗を踏まないようにしながら逃げた。雷の青い光が無気味で恐かった。家が流されていくのを見た。」

アセスメント：水害で家を流された体験やその後の苦難に満ちた生活、独り暮らしが長くなったことなどが関係して警戒心が強くなり、物盗られ妄想を形成しやすくなった可能性が考えられる。勿論、物忘れが関与している可能性もある。同施設内での環境調節後、被害妄想的言動は明らかに少なくなっている。

四回目の訪問時の様子：「眠れている。盗られることは心配していない。」と穏やかな表情で話す。

アセスメント：被害妄想は消退している。HDS-Rは17点で面接開始当初と変わっていない。

事例5 老年期に抑うつ状態を呈したケース

当時26歳、女性。夫と二人暮らし。

(水害について)「長男が3歳の時だった。家は大丈夫だったけど田んぼは全部流された。お嫁に行ってもなかつた妹は何もかも流された。実家に戻っていたがいなくなった。村の人が総勢で捜しに行ってくれた。今でもそのときのことを思い出す。谷の水があふれていた。おにぎりを作って帰りを待っていた。」

(水害後)「どろんこの中に入って家の中を片づけた。難儀した。なかなか助けてもらえなくて。今に比べたら当時は誰も助けに来てくれなくて自力で立ち上がった。お米の配給で高野山まで3里の道を歩いた。」

(人生を振り返って)「80年生きたら体験しないとわからないつらいことがたくさんある。戦争のこともある。3年前に長男に病気で先立たれてから2ヶ月間は眠れず、食べられない日が続い

た。体重が 52kg から 40kg になった。うつ病のようになった。」

事例6 面接中、暴露による生理学的反応を呈したケース

当時25歳、男性。現在は奥さんと二人暮らし。子どもは二人。

(水害の状況について) (語り始めると感情が高ぶり、言葉が振え聞き取りにくくなる。)
「昭和28年。あれはすごかった。春からずっと雨だった。前の晩から降った雨と雷がすごかった。雷といっせいに降ってきた雨、あんな雨、すごかった、よう忘れん。近所の嫁さん、腹大きかった。祇園祭の日、実家に帰っていて亡くなった。あれは可哀想やった。あそこは沼のようになっていた。あれは可哀想やった。お堂に土方たちがおった。みんな遠慮して人家の方へは行かなかった。それで助かった。大きな丸太につかまって中学生の女の子が『助けてくれ、助けてくれ』と叫んでいたという。顔中傷だらけだった。その子は助かった。その子の母も兄弟もみな死んだ。お父さんと二人で生活した。結婚して子どももできたという。たった一人生き残った自分のいとは兄弟も親もみな亡くした。うちの母親が見に行った。いとはその姿を見て喜んだ。母親は発狂したみたいになっていたらしい。あの時のつらさは今も消えていない。思いだしただけで涙が出る。」

(どのように受け止めましたか) 「こりゃまあ、しかたないだけ思ってきた。」

(当時の精神状態について) 「あの時の雨の凄さ。最初のころは雨が降ると恐かった。でもあの時の雨は違った。地響きの音がした。あれが恐かった。夢に出てくるようなことは一度もない。」

(世代間の伝達について) 「あんまり子どもにしゃべったことはない。」

(復興について) 「村の復興の時は土方ばかり。分村すると言っていたけど分村されないように一生懸命がんばった。」

(回復できると思ったのはいつ) 「翌年、田んぼ作って米できたとき。うれしかった。どんな苦難でも乗り越えていけるように思うよ。」

(他の災害について) 「昔のこの村の災害のこと思うたら小さいことに思うよ。」

【考察】

先の結果と事例を参考に補足を加えながら考察を行う。

(1) PTSD との関連において

当時を振り返って PTSD と診断される可能性のある人は事例1と事例2の2名であった。事例1は幼い娘を亡くして無力感が強く何も語れず、被災後少なくとも9年間は感情が麻痺したままであった。10年目に涙が自然に溢れ続ける一日を経験している。しかしその後も水害のことは口にすることなく生活してきた。今回の面接で初めて気持ちを言葉にできたという。事例2は9歳時に被災し、雨が降るたびに無意識のうちに叫びながら外へ駆け出していく行動(解離性フラッシュバック)を繰り返した。家族はその姿に耐えられず、一家で村を離れた。本人は現在も村に戻ると恐怖心が蘇るため村での寝泊まりはできないという。他に PTSD と診断される人はいないが、PTSD の診断基準が部分的に認められる人は大勢いる。まず雨や水に対する恐怖感は調査した35名中20名に認められた。症状は長く残存し、10年以上続いたという人と現在も続いているという人を合わせると13名で全体の約37%に相当する。同様に水害後、警戒心が強くなったという人も多く、4名は「雨が降ると荷造りを始めた。それは何年も続いた」という。

現在も警戒しているという人も4名いて、1名はやはり雨が降ると逃げる準備をするという。3名は雨や水の音を聞くと神経過敏になる。回避症状を認める人は事例2を含めて2名であるが、二人とも村を離れて生活している人たちであった。面接中、暴露による心理的苦痛を示した人は事例5の1名、暴露による生理学的反応を示した人は3名であった。事例6もこれに該当する。以上のようにこれらの症状は50年以上が経過した現在もなお続いているものも多く、一度形成されると容易には消退しないものであることがわかる。

(2) 回復について

PTSDの可能性のあった事例1、事例2も含めて人生を肯定できている人は35名中33名である。多くの人は人生を肯定する気持ちを「精一杯生きてきました」と表現した。そして生きてくることができたのは「みんな同じだったから」と説明した。自然災害の場合、生活の復興が第一に重要なことになる。被災後、村の人たちは生活必需品を確保するために毎日のように片道3里の山道を往復した。雨露をしのげるだけの住居を確保して、橋や道路の復旧作業に従事しながら懸命に家族を養い生きてきた。みんな同じという気持ちと復興に向けての連帯感が心の支えになっていたのである。仲間意識が大事なことは村を出て他所に田畑を購入して新しい生活を始めた事例3の人の体験がよりはっきりと物語っている。この家族はなけなしのお金をはたいて移住したものの食べる物も着る物もない貧しさが近隣者には理解されず、「馬の骨」とさげすまれた。その時の孤立感と屈辱感は水害よりも苦しいものであった。何年かして村に戻って村の人たちから「〇〇さん」と親しみを込めて呼ばれるようになってやっと癒されたという。

極端な言い方をすれば人としての自尊心を傷つけられることは何よりも辛いことであって、自尊心の回復こそが人生を肯定的に導くものにほかならない。さて多くの人が症状を持ちながらも人生を肯定できているのに対して、事例4と事例5の2名の人はどちらかといえば否定的に思われた。事例4は老年期の妄想状態にあり、事例5は老年期の抑うつ状態を経験していた。二人とも被災後の人生の中で新たな悲しい体験をたびたび重ねていた。水害によって疲憊しきったところに新たな不幸が重なり、態勢を建て直すことができないうままに耐え続けているうちに次第に気力も弱くなってしまったのであろう。二人は「人生は辛いことが多すぎる」と語った。度重なる不幸が先行するトラウマ的ストレスからの回復を妨げるだけでなく、新しく傷口を広げてしまうのである。事例4は水害後、他人の軒先を借りねばならない生活を経験している。恐らくそういう過程の中で生じた警戒心が老年期の被害妄想の形成に影響を及ぼした可能性が考えられた。(筆者は何度か面接を重ねた結果、水害の話をするによって御本人の気持ちをかなり了解できたと捉えている。)事例5では老年期の喪失体験が抑うつ症状の直接の原因であろうが、53年前の水害によるトラウマ的ストレス、さらには追い討ちをかけるように生じた家族の不幸がその後の人生全体に暗い影を落としているように思われた。

(3) 言語化と伝達について

トラウマからの回復を考えると、内面を言語化することは重要なことである。村に残った人の多くは水害に関わることをお互いに自然と口にすることができた。しかし事例1のように悲しみを全く封印してきた人もいる。一方、村を離れた人たちは必然的に言語化する機会が減

少しした。その反面、離れたことによって恐怖心が和らぐという利点があった。ただし村に帰ると恐怖心は蘇り、生活上の支障を来すので根本的解決にいたるのはそれほど容易なことではない。「慰霊のための集い」も内面を言語化する機会の一つである。村の中で特に大きな被害を受けた地域では50年が過ぎた現在でも毎年、内外から縁故者が慰霊のために集っている。そこでは死者を弔うだけでなく、お互いを語り合って悲しみを繰り返して言語化し、癒しが求められているように思われる。さらに、記録を残すことも内面の言語化という点では有効な方法である。H村では貴重な水害の記録が村の人々の手によって残されている[9]。また村を出た人たちも節目の年に文集を出している。これらは自尊心の回復の助けにもなっているものと思われる。

一方、記録や文集は言語化という意義の他に次世代に対する貴重なメッセージという側面も持つ。今回の調査対象者の中では記録を残している人は2名で全体的にはそれほど伝達することに積極的とは思えなかった。しかし何らかの形で自分たちの体験を言語化し、メッセージを後世に伝えることが必要である。それは個人的なトラウマからの回復という意味だけでなく、一つの生きた教訓と範例を後世に伝えるという点で重要なのである。なぜなら歴史が繰り返されることは決して稀なことではないからである。

例えば、1953年の水害から遡ること63年前の明治22年(1889年)、紀伊半島の南部はやはり大水害によって多数の死者と家屋倒壊に至る大災害を蒙っている。

明治22年8月18日、台風が四国東部に上陸して岡山県から鳥取沖に抜けて北東に進んだ。和歌山県田辺市では8月18日の降水量は368ミリ、8月19日は902ミリであった。1時間あた

りの雨量は最大170ミリに達した。和歌山県側の死者が1221人、奈良県側では250人でそのうち十津川村が168人を占めた。奈良県十津川村は熊野川の上流に位置する。この時の災害機序は次のように考えられる。まず1854年の南海大地震のために紀伊半島一帯の地盤が弱っていた。次に維新後の森林伐採で山の治水力が低下していた。そこに未曾有の集中豪雨が襲った。弱った地盤は土石流と山津波を誘い、さらに土砂で川が堰止められて新しく20数個の湖(天然ダム)が出現した。新湖の水位は瞬く間に上昇し、やがて次々に決壊した。十津川の下流に当たる熊野川はそのために大氾濫した。南海大地震と森林伐採そして未曾有の集中豪雨、天然ダムの出現と決壊、この機序はH村の水害と全く同一である。H村では1946年の南海大地震で地盤が弱くなっていた。そして戦後の森林伐採で山は荒れ果てていた。そこに未曾有の集中豪雨が村を襲ったのである。

被災した人々は十津川村でもH村でも辛苦を極めた。食料と飲料水が手に入らない。太陽と雨を避ける場所がない。そんな状況からでも復興への道がはじまった。村を出る人と村に残る人、この構図も同じである。ただ異なったのはH村では個人的に村を出たのに対して十津川村では集団移住がなされたという点である。十津川村は幕末の御所警備、天誅組の挙兵、戊辰戦争などに関わって築いた政府の要人とのパイプを生かして北海道への移住が可能になった。そして移住した人々が苦難の末に築きあげた村が現在の新十津川村[10]である。出立の日、移住者は二隊に別れて進んだという。一隊は奈良県内を北上した。もう一隊は小辺路と呼ばれる山道を辿って和歌山県内を北上し高野山へ抜けた。偶然にもH村はこの道筋に当たっている。生きた

範例が付近を通過していたのである。人々が水害からの復興過程において当時の範例をどこまで活かすことができたかは不明だが、H村の人たちも大きな苦難を乗り越え、現在は立派に復興を遂げている。深い心の傷と悲しみは決して癒されることはないとしても生き抜いた事実こそが貴重なメッセージである。それは次世代に対する生きた教訓と範例そのものといえよう。

(稿を終えるにあたり、この調査のためにひとかたならぬ御配慮、御尽力を賜った保健師の弓庭喜美子さんに心から感謝申し上げます。)

【参考文献】

- (1) 坂口守男、朝井均、朝井忠、他：紀伊半島過疎山間部における独居老人の生活状況と精神的諸問題：大阪教育大学紀要 第 III 部門 52 (2) : 143-152、2003
- (2) 坂口守男、朝井均、朝井忠、他：地域在住高齢者のバウムテスト：大阪教育大紀要 第 III 部門 53 (2) : 83-93、2005
- (3) 坂口守男、朝井均、朝井忠、他：地域在住高齢者のバウムテスト (II) —長寿者のバウムの追跡調査—：大阪教育大学紀要 第 III 部門 54(1) : 63-76、2005
- (4) 坂口守男、朝井均、朝井忠、他：地域在住高齢者のバウムテスト (III) —高齢者の精神症状とバウムテスト—：大阪教育大学紀要 第 III 部門 54 (2) : 115-125、2006
- (5) 坂口守男、朝井均、朝井忠、他：地域在住高齢者のバウムテスト (IV) —非認知症群における年齢間の比較—：大阪教育大学紀要 第 III 部門 55 (1)、印刷中
- (6) 坂口守男、朝井均：花園村における地域保健活動報告書：大阪教育大学保健センター：83 頁、2005

(7) 朝井均、坂口守男、朝井忠、他：和歌山県下にある過疎村における地域保健活動—腹部超音波集検の試み—大阪教育大学紀要第 III 部門 51 (1) : 159-168、2003

(8) 大塩恭子、朝井均、坂口守男、他：和歌山県下にある過疎村における地域保健活動—2003、2004 年度のがん検診の実態—：大阪教育大学紀要 第 III 部門 54 (2) : 99-113、2006

(9) 水害記録誌 よみがえった郷土—昭和 28 年大水害をふりかえって—：発行者 部屋敏三、昭和 57 年

(10) 川村たかし：北へゆく旅人たち 新十津川物語：偕成社、1977